

# どうぶつこうえんニュース

Chiba Zoological Park News

No. 20



# どうぶつと私…(15)

Animals and I

## 「赤スズメ」の長寿記録

The Longest Living Red-Sparrow  
(red band on its leg)

唐 沢 孝 一

東京都立城東高等学校教諭  
都市鳥研究会代表



千葉県市川市にある我が家で、野鳥のための餌台を造ったのは1973年のこと。以来、20年以上にわたっての野鳥を観察しているが、やって来るのはスズメばかり。最初のうちは、「何だスズメか」と残念でならなかった。しかし、何年にもわたってじっくり観察してみると、実にしたたかで、奥の深い鳥であることがわかってきた。

毎朝、スズメを見ているうちに、いろいろな疑問がわいてくる。「毎朝やって来るのは同じ個体なのだろうか」、「寿命は何年くらいだろうか」、こんな些細な疑問にとりつかれ、スズメの個体識別をすることにした。環境庁から捕獲許可を得て、42羽を捕獲。イギリスから輸入したカラーリングを取り付け、各スズメに名前を付けた。

名前を付け、個体識別ができるようになると、スズメ・ウォッチングの楽しみは倍増した。毎日やって来るスズメもいれば、数日で消えてしまうのもいる。警戒心も個体差がある。何年か調べてみると、我が家の周辺で生まれた若鳥は秋までに消えてしまうが、成鳥は長期間にわたって定着していることが明らかになってきた。

1984年12月16日に捕獲した「赤スズメ」(赤色の足環装着)は、ほとんど毎朝やって来て、餌台の中央に陣取って餌を食べていた。他のスズメは、2～3年経つうちに次々と姿を消してしまっただけなのに、この「赤スズメ」だけは4、5年経ってもやって来る。野外でのスズメの寿命は6年くらいだと言われているが、あっさりと6年、7年と長寿記録を更新した。その「赤スズメ」も1992年1月3日を最後に、ついに消息を絶ってしまった。近所を隈なく探したが、発見できなかった。「赤スズメ」は、捕獲時の1984年12月には成鳥だったので、その誕生は1983年の春(繁殖期)以前であろう。とすれば、野外での生存期間は少なくとも8年半(1983年6月～1992年1月)となる。赤スズメが姿を消して2年半が過ぎたというのに、今でも、スズメを見るたびに赤い足環の有無が気になってならない。

## 目 次

表紙 マレーバク	1
どうぶつと私⑮ 「赤スズメ」の長寿記録	2
グラビア アルダブラゾウガメ	3
特集 「動物たちの建築」	4
識別のお話(3)	5
飼育レポート 育雛室より	6
動物公園の動物⑮ 動物公園の植物⑤	7
動物公園日誌から	8
飼育よもやま話	10
健康管理センターから 平成6年度後期行事予定表	11

### 表紙の動物説明

#### マレーバク

バクの仲間では奇蹄目の中では原始的なグループで、現在、アメリカ大陸にいる3種と東南アジアにいるマレーバクの4種だけです。

マレーバクはバクの仲間では最も大きく体長250cm、体重340kgにもなります。ジャングルや水辺の草地に単独で住み、主として夜間活動します。

生息地の森林の減少などで非常に数が少なくなっています。

撮影・宮川 千尋

### 動物飼育数

哺乳類	71種	473点
鳥類	93種	414点
爬虫類	5種	24点
両生類	1種	2点
魚類	2種	13点
総計	172種	926点

平成6年7月31日現在

## アルダブラゾウガメ

Aldabra Giant Tortoise

カメ目 リクガメ科



撮影・清水 太郎

ゾウガメには2種あり、ガラパゴス諸島に分布するガラパゴスゾウガメとシェイシェル、アルダブラ諸島に分布するアルダブラゾウガメがいます。船員の食料として乱獲され、ガラパゴス諸島では絶滅寸前になり、北アメリカの動物園が中心となって増殖に力を入れ、現地でも繁殖の努力をし、野生に戻せるまでになっています。一方アルダブラゾウガメは島に船が近づきにくかった関係でガラパゴスほどの乱獲はされませんでした。その数は少なく、厳重に保護されています。ところが、ガラパゴスゾウガメに比較して繁殖例は少なく、動物園でのより一層の努力が期待されています。わが国で飼育されているゾウガメのほとんどはアルダブラゾウガメです。

宗近 功 (Isao Munechika)

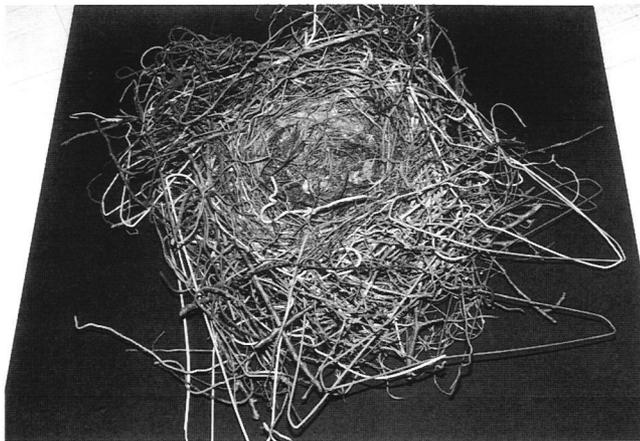
# 動物たちの建築

## The Art of Nest Building

動物公園内科学館において、1993年10月より1年間にわたり、題して『動物たちの建築』～巣作りの知恵と工夫～を開催いたしました。

私たちが普段呼んでいる『巣』とは、鳥では卵をかえし、そしてひなを育てる『場所』で、動物一般的にも子供を生み、育てることには変わりありません。それぞれの動物が独自に作り上げる『巣』に共通している事は、快適な空間を生み出しているという事でしょう。つまり、それぞれの子供をより確実に育て上げるために、有効な方法を編み出しているのです。

メジロでは草やコケなどをクモの糸を使って樹上に作ります。エナガは早春に樹上にドーム型の巣をつくり、イヌワシ、トビなどでは高い樹上、絶壁に巣をかけます。ガンカモ類は産座のアシの葉、茎などに自分の綿毛を利用し、その巣を水辺で見ることができます。また砂地を利用するペンギンなど、その種独特な巣作り、巣材等を見ることができます。また変わり種として、ニューギニア地方に生息しているツカツクリ類では腐葉土などで作った大きな塚に卵を生みます。そして、その発酵熱で卵をかえします。身近な例としてカラスなどは、巣材として人間が普段利用しているビニール、ハリガネを数多く利用した、器用な巣を電柱などで見る事もできます。(下の写真参照)



ハタオリドリ類では植物の繊維を利用し、ひとつの巨大な巣を作り上げるもの、またある種では1羽ずつが小枝等を活用し、繊維をからめ、入口を下に向けて巣をつくり外敵に備えます。

次に、ニューギニア地方に多く生息するニワシドリ(庭師鳥)について紹介をしてみました。ニワシドリは巣のような庭を構築しますが、この場はあくまでも交尾をする場であり、子供を育てる『場』とは違ってきます。卵を生み育てる『場』は別に樹上に粗末な巣をかけます。

ニワシドリは18種に分類されていますが、その構築物は大きく分けて①トンネル(通路)づくり“アベニュー型”、②舞台づくり“マット型”、③塔づくり“メイポール型”の以上3タイプに分かれます。今回、それぞれの代表的な種を紹介していますが、共通している点はメスの注意を引くべく、その踊り場をさまざまな形、色の果実、葉、石などを使って飾る点にあります。なかにはみずからの唾液を混ぜ合わせ『絵具』としてペイントを施す種もおります。(右上の写真参照)



次に千葉市動物公園でも見る事のできるプレーリードックとビーバーについて地下の見えざる構築物についても比較してみました。

北米に生息し集団で生活しているプレーリードックは、寝室、食料貯蔵庫などいくつかの部屋にわかれ、空気の換気が施されて外界よりも温度、湿度の差が少なく快適な環境となっています。一方のビーバーの“ダムづくり”は有名で、巣室の床は水面より数十センチも高くつくられ、出入口も水面下に開いていて外敵に備える事もできます。

ほかに身近で時折見る事のできるハチの巣を実物にて何例か展示しましたので、それらを直接目で見、触っていただき、空気調節完備の育児室など、完成度の高い巣であることへの感動を体験できたのではないのでしょうか。

今回の特別展「動物たちの建築」では主に、実物にて鳥の『巣』を種別ごとに比較してもらうのと同時に、その巣材と構造の工夫に焦点を当てて考え、また日本では見る事のできない『ニワシドリ』の構築物についても紹介を試み、その工夫と不思議さに、うなずいた方も多かったのではないのでしょうか。

今後また、このような動物のすばらしい本能なども機会があれば紹介してゆきたいと思っています。

牧野 辰男 (Tatsuo Makino)

For one year now, since October 1993, the Zoological Hall has hosted the exhibit *The Art of Nest Building — Intelligence and Resourcefulness in Nest Construction*, with a variety of nests on display. By 'nests' we are referring to that place where birds and other animals hatch their eggs or give birth, and rear their young. Nests provide a comfortable space where the young can be raised safely. For example, the Japanese white-eye uses grass, moss, and spider webs as nest building material, while the crow resorts to bits of plastic and wire. Then there is the common scrub hen, which lays its eggs in a mound constructed from humus; the heat produced through decomposition hatches the eggs.

The nests of the 18 different varieties categorized for the bower bird all share the following characteristics: fruit, leaves, and stones of various colors and shapes are used for decorating the surroundings of the nest to attract the female. Some mix these materials with their own saliva to produce a kind paint. Many other kinds of nests are on exhibit, including that of the prairie dog, whose nests have several rooms that are well ventilated and vary little in temperature or humidity, and that of the beaver, which constructs magnificent dams on the water. The construction of these nests demonstrates the intelligence and resourcefulness of birds and other animals.

# 識別のお話

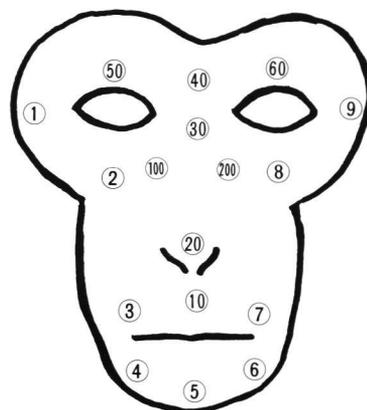
その3

## The Subject of Discrimination

今回は動物園での識別についてお話しします。

動物園での識別は今までお話ししてきた方法をほとんど使用しています。大型動物には耳タグを、鳥類には足環などを付け、キリンやシマウマなどは体の模様で識別します。ただ、動物園ではできるだけ本来の動物の姿を見て頂くのが使命ですので、あまり耳パンチや焼烙など見た目に痛々しいものや動物本来の姿を損ねる方法は使用したくありません。識別とは違いますが、家畜として飼われているブタやヒツジは管理の都合上よく『断尾』といって尾を切ったり、事故防止の為、ウシの角を伸びないようにしますが動物園では本来の姿を見て頂いています。このように動物園での識別の方法は、飼育管理上必要な識別と展示として見て頂く場合の姿との『共存』が必要になります。動物本来の特徴を損なわない様、出来るだけ見た目に気にならない様に工夫しなければなりません。(ですから本当はあまり手の内を明かしたくないのも本心なのですが……)。このシリーズの冒頭、沢山いるニホンザルはみんな名前と番号がついていて見る人が見れば、わかるようになっていたと申しましたが千葉県動物公園では1頭1頭に番号が入墨(いれずみ)されています。といっても野球選手の様に背中に番号をつけているわけではありません。図-1の様顔の場所に対応する数字を決めておきその組み合わせで表現します。ちょっとした暗号のようなものです。毎年1回秋にサル達に予防接種を行いますが、この時その年の春に生まれた仔ザルに初めての入墨を行ないます。この入墨一見するとホクロか汚れのように見えるのですが、そこがこちらの狙い目なのです。表-1はニホンザルの名前と番号の表の一部ですが、皆さんわかるかどうかチャレンジしてみてください。(但し、双眼鏡片手にでないちょっと……)。

さて、この入墨の暗号も通用するのは千葉県動物公園の中だけです。もし他の動物園に移動して、その動物園のニホンザルにも同じ入墨がされていたら、わからなくなってしまいます。動物園で飼育されている動物の中には野生では絶滅に瀕している種類が沢山います。このような種類は国際的に保護されていて、その移動には厳しい規制(ワシントン条約)があります。また国際的に1頭1頭の血統を登録して、動物園間で繁殖計画をたてて繁殖に取り組んでいます。この場合やはり重要なのが個体識別です。この識別は前に挙げた千葉県動物公園の中だけで通用するような識別では意味がありません。極力客観的な他園と重複しない識別と一緒に登録する様にしています。入墨の場合は、めだたない場所に番号そのものを入れ、それを写真に撮っておいたりします。鳥では脚環に動物園のイニシャルと数字の番号が入っています。またシマウマの様な動物では部位を統一して模様を写真に撮っておきます。そしてこの識別と一緒に世界でその一頭だけの『国際登録番号』を付けてもらいます。例えば千葉県動物公園のグレイシマウマの一頭はその縞模様の写真と一緒に「2843」という番号で登録されています。グレイシマウマの国際登録番号2843番といえば世界に一頭しかいないのです。そしてもし疑いがでた場合は縞模様の写真により確認ができます。しかしシマウマの模様のような生まれな



※70は50+20  
80は50+30  
90は50+40  
で表します。

図-1

番号	名前	番号	名前	番号	名前
62	ズーム	133	ナツメ	237	ノダケ
31	ナナカマド	136	ヒサギ	239	ナベワリ
42	ムク	137	フウ	238	クララ
51	リンゴ	135	ネズコ	281	ノアザミ
37	ヒルギ	144	ムベ	285	フジバカマ
38	フヨウ	232	ニガキ	283	ノコンギク
35	ネム	132	フジキ	282	ニセアカシア
34	ヌルデ	234	ノビル	284	ヒメジャガ
15	コブシ	235	ヒルガオ	114	カザグルマ
141	ミカン	146	ネコノシタ	287	ニガイチゴ
121	サフラン	280	ヒデリコ		

表-1

がらの特徴以外に入墨やリングなどでは悪用される場合がでてきます。そこで最近では前回紹介したマイクロチップを体に埋め込み、その番号で識別しようといった動きがでてきました。すでに外国では普及しはじめており、特に今まで入墨やリングなどの装着が困難で一頭一頭の特徴もとらえづらかった小型の動物に効果的といえます。小型のマーモセットなどでは今までその小ささゆえに識別方法が問題で、野生のものの密輸の取締りに決め手を欠いていましたが、このマイクロチップの導入により密輸の防止が期待されています。また動物園の日常管理においても確実な個体追跡が可能になるとの期待ももたれています。

この他に手間を要しますが、DNA分析することにより個体を識別することも可能です。これは限られた集団の中での親子の判別にも使われます。

個体識別の手法はその単純なものから始まり、より高度な技術まで幅広く導入されていますが、すべてにおいて高度な技術を導入すれば良いのではありません。どういう意味でどの程度わかれば良いのかによって使いわけることが重要です。

今回で識別についてのお話は終わりにします。駆け足の紹介しかできませんでしたが、ちょっと目先を変えてどこに識別のマークがついているかを捜す動物園探索も面白いかもしれませんね。飼育係と知恵くらべをしましょう。

## 育雛室より

## Report from the Incubation Room

今年は、一部展示場のカラス除け対策も完成しましたので、主にツル類に重点を置き、人口孵化に取り組んで来ました。現在まだ育雛中ですので、その途中経過を報告します。

クロヅルに関しては、出来るだけ羽数を取るために、補充卵を産む習性を利用しました。その経過は、5月4日に初卵が確認され、3クラッチ<sup>\*</sup>で合計7個の産卵を見ました。そのうち第2クラッチ、5卵目までは取り上げ孵卵器に入れ、第3クラッチ目は親にまかせました。

第1クラッチ目は、3個産卵し1卵目は中止卵、2卵目、3卵目は孵化、第2クラッチ目は2個産卵で1卵目は孵化、2卵目は中止卵でした。

第3クラッチ目は、2個産卵で1卵目は自然孵化、2卵目は親が2羽の雛を育てるのが厳しいという理由と、産卵間隔が5日程開いていたので、第3クラッチ1卵目が孵化した段階で親が巣から離れる恐れがあるという理由から、孵卵器に取り、人口孵化に切り替え7月1日に孵化しました。

結果は全て有精卵で、うち2卵は中止卵、5卵の孵化を見ました。

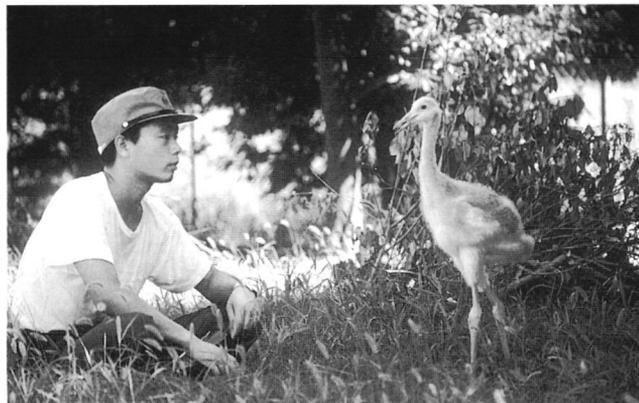
次に育雛状況ですが、第2クラッチ目の孵化個体は、15日令時に先に孵化した個体との闘争で、股関節を痛め起立不能となり21日令で淘汰しました。8月10日現在で3羽人工育雛、1羽自然育雛中です。第1クラッチ目の孵化した2羽の個体はすでに2ヶ月令を過ぎ、頭部を除きほぼ親鳥に近い羽色となり、朝寝小屋から出ると、一生懸命に飛翔練習をくり返し10m滑空するまでに成長しています。第3クラッチ2卵目の個体も現在40



日令を過ぎていますが、やはり途中で脚を痛めるアクシデントがあり、右脚の跗蹠<sup>ふしよび</sup>部分が外側にかなり開いているため、歩行が少々おぼつかないのが今後成長していく段階で気がかりです。

タンチョウに関してですが、これも羽数を多く取るため、5月9日に初卵が見られたので直ちに取り上げたのですが、2卵目はなかなか産卵せず、5月26日に産卵を確認しました。間隔があいたので2クラッチ目と判断し、今度はもう1卵産卵するまで待ったのですが一向に3卵目を産まず抱卵に入ってしまったので、この卵は孵化まで親にまかせることになりました。1卵目は採卵後ただちに孵卵器に入れ人工孵化を試みました。

人工孵卵をする時には、普通何日か毎に発生の状況を確認す



るために光を照射する検卵器を使用するのですが、手持ちの検卵器ではダチョウ、カモ、キジ等は検卵出来ても、ツルやエミユウの卵は光を透さないため確認出来ません。そこで他の方法で確認するのですが、発生が進み後期の段階になると卵の中で胚が活発に動きますので、平な面に卵を置きますと卵自体が、ピクピクッと動きますからそれで有精・無精の判断をします。孵化数日前になりますと鳴き声も聞こえて来ます。タンチョウの孵化日数は31日～36日の間です。今回、1卵目も孵卵器に入れて20日目過ぎから卵が盛んに動くようになり、28日目からは鳴き声も聞こえて来ました。30日目には中から殻をつつく音が聞こえましたが、2日経過しても一向に卵が割れて来ません。少しでも穴があれば人工的に介添え可能なのですが、嘴打ちが始まらないのでどうしようもありませんでした。結果死ごもりとなってしまいました。どうも卵の中で雛が発育し過ぎ身動き出来ない状態にあった様です。通常死ごもる時は、雛に活力がない場合が多いのですが、今回は卵の中でも活発に動き、鳴き声も力強かっただけに残念です。

2卵目は、親の抱卵場所が展示場の段差のある高い所でしたので、孵化しても親が雛を育て辛いという理由と、タンチョウ展示場はカラスによる食害も考えられるので孵化予定日の3日位前に卵を採卵し、孵卵器に移し6月28日に孵化しました。孵化後は人工育雛としました。

雛は20日令過ぎ頃より趾が曲り始め、日光浴不足、運動不足、カルシウム分の不足等が考えられましたので、給餌には魚を中心とカルシウム分の添加を強化し、また極力日光浴、運動をさせる一方、趾の矯正をしました。現在45日令を過ぎていますが、まだ何本かの趾が曲っているので、現在もテーピングをして矯正中です。

以上クロヅルとタンチョウの雛達の途中経過ですが、それぞれの詳しい事は別の機会に報告したいと思います。

鳥類・水系チーム

Staff of Birds and Water System

(柴海 邦成, 樽川 修, 小林 正典)

\*クラッチ 1回に生む卵の個数、  
個数は鳥によって違う。

動物公園の動物…⑮  
Animals the Chiba Zoological Park  
～ウシ(ジャージー)～  
Domestic Cattle(Jersey)

ウシは今から9000年前に中東で最初に家畜化されたと考えられています。今日、アフリカやインドに多く見られる肩部に瘤のような隆起を有するゼビューウシと、瘤がなく体が少し大型になるヨーロッパ系のウシに大別されます。以前、この2系統のウシは別種の野生ウシから家畜化されたものであると言われていましたが、現在は、絶滅した野生ウシ、オーロックスから



家畜化されたと考えられています。今回、紹介するジャージー種はヨーロッパ系のウシで乳用種です。原産地はイギリス、チャンネル諸島のジャージー島です。フランスの在来種、ブルトンとノルマンディーの交雑によって作出され、品種の成立初期にインド系のウシが関与したともいわれています。ジャージー島が地理的に隔離されていたこと、また州の法律で他の品種との交雑が禁止されたことが、この品種の成立には大きな力を及ぼしました。ジャージー種は各個体の資質(乳量、乳脂率、体重など)の斉一性が非常に高いのです。これは品種の成立過程でかなり近親交配が行われたため、各個体の近交度が高いせいなのです。動物園の野生動物は遺伝子の保存という観点から、なるべく近親交配をせずに遺伝子の多様性を保とうと努力していますが、産業動物である家畜動物はカメラなどの工業製品までとはいかなくても、ある一定の品質というものをそろえる必要があります。この点からジャージー種の資質の斉一性は高い評価を受けてきたのです。ジャージー種は種としてバターやクリームを生産するために改良をうけてきたため、約5.0%以上の乳脂率があります。また先天的にカロチンをビタミンAに還元する能力が弱く、体脂肪に強い黄色が現れてしまう欠点があり肉用としては不向きです。しかし、乳脂肪にもカロチンの色素が現れるため、牛乳はうっすらとクリーム色を帯び、本種の牛乳から製造したクリームやバターは大変美しい色に仕上がるので好まれています。乳牛としては最も早く(明治7年)、わが国に導入された品種です。牛乳生産ではホルスタイン種には遠く及ばないため、利潤追求の酪農には不利であり、また近年、消費者が脂肪の取り過ぎを警戒するようになったので、本種にとっては厳しい環境となっており、飼育頭数はかなり少なくなっていました。しかし、品種としての完成度は非常に高く、その資質は今後、必ずや役立つときがくると思います。

松本 和人 (Kazuhito Matsumoto)

動物公園の植物…⑤  
The plants in the Zoological Park  
～ヤブツバキ～  
Camellia Japonica

動物公園の正門を入ると、入口広場に羅針盤があります。羅針盤を見て北へ向かい、道路をしばらく歩くと白い2階建の建物が見えてきます。そこが動物科学館です。

動物科学館右手に、ヤブツバキの大木が植えてあります。

樹高10m、幹周1.4m、樹齢推定140年、この樹木は、昭和59年に近隣の竹林より移植されたものであり、動物公園の景観効果を高めるばかりではなく、大変貴重な樹木でもあります。

ツバキの花は美しい姿のまま、ポトッと落ちる。

その様は、一種異様な美しさをたたえる。

昔、武士が首が落ちるとして忌みきらいましたが、俳句では「落椿」の季語があるほどで、多くの句に詠まれています。

ヤブツバキは常緑喬木で、成長はやや遅く、高さ6~18m、径0.3~0.5mまでに成長する樹木で、2~4月に枝先に5弁花を咲かせます。

分布としては、本州、四国、九州の海岸地帯に分布する樹木であり、ツバキの原種の代表的なものです。

他に、ユキツバキは別名オクツバキといい、多雪地帯に分布し、花弁はやや細く、筒状の部分が短いのが特徴。

そのほかユキバタツバキ、リンゴツバキ、サルウインツバキ、トウツバキなどがあります。

園芸品種の代表的なものには、半開ラッパ状に濃紅、白、桃



色などの花を咲かせるワビスケ、千重咲きのオトメツバキなどがあります。

名前の由来は、藪の中に植えるの意味でつきました。

ツバキの実から取れる油を食用にしたり、油の絞りカスで髪の毛を洗ったり、実をくり抜いて笛にしたりして遊んだようです。

園内には、大池、入口広場に173本、科学館、子ども動物園に66本、公園全体で334本のヤブツバキが生育しており、動物公園の景観効果を高めています。

篠田 文男 (Fumio Shinoda)

# 動物公園日誌から

From Zoological Park Diary

'94年 2月1日～'94年 7月31日

- 2月2日 レッサーパンダ, 最初の発情終了
- 2月3日 キリン (ヤエ) の室内暖房をする
- 2月4日 子供牧場の獣舎の補修工事始まる
- 2月5日 ハートマンヤマシマウマの仔 (エースケ) 搬出  
" ラッパチョウ2羽新着
- 2月8日 ベニコングウインコ, 1羽死亡
- 2月9日 ハートマンヤマシマウマ交尾
- 2月12日 積雪20cmのため, 動物早目に収容  
" 「バードウォッチング」開催
- 2月13日 積雪のため, 青草入荷せず
- 2月15日 動物科学館で, 飼育技術者認定試験実施
- 2月16日 コフラミンゴ1羽, カラスに殺される
- 2月18日 ヤツガシラ, 昨年と同じ巣箱で抱卵  
" ゴリラ室内展示室にチップを入れる, よく遊ぶ
- 2月20日 ハートマンヤマシマウマ (エリス), 雄1頭出産  
" 「ゆかいな森の音楽会」開催



- 2月21日 **バードホールにラッパチョウを放す**
- 2月22日 レッサーパンダ, 発情終了
- 2月23日 エミュウ, 3羽孵化
- 2月24日 カンムリヅル, 1羽死亡 エミュウ, 3羽孵化
- 2月25日 アフリカ草原改修工事終了
- 2月27日 ハワイガン, 1羽孵化  
" 「ワンポイントウォッチング」開催 (マーモセット)
- 3月1日 セーブルアンテロープ, 新しい放飼場に出す  
" キリン雌 (アジム), 改修した放飼場に出ない
- 3月2日 コフラミンゴ 10羽, 新着
- 3月4日 **アジアゾウ雄の牙が折れる**  
" ヤツガシラ1羽, 死亡
- 3月7日 シロエリハゲワシ, 産卵
- 3月10日 ヤツガシラ, 巣箱内の雛の声を確認  
" 子供牧場の牛3頭を仔牛と交換  
" ダマワラビー, 2頭新着
- 3月12日 アカテタマリン, 2頭繁殖  
" 「アニマルスクール」開催 (ウンコの話)
- 3月14日 抱卵中のファンボルトペンギンの卵, 割れる
- 3月15日 セーブルアンテロープ, 雄1頭繁殖
- 3月16日 カンムリバト, 営巣



折れたゾウの牙, 長さ85mm, 長径29mm, 短径20mm, 重さ70g

- 3月17日 キリン雌 (アジム) 改修工事終了後, 初めて放飼場に出る  
" シバヤギ, コリデール, アオミミキジ, ハムスター新着
- 3月20日 アジアゾウ, 日中かなりスパーリングしている  
" 「ワンポイントウォッチング」開催 (ラクダ)
- 3月21日 ハイイロガン, 4卵抱卵
- 3月23日 シロガオマーモセット1頭, 脱肛をおこす
- 3月24日 昨年生まれのヤツガシラ, 抱卵している
- 3月26日 ムネアカタマリン, 2頭繁殖
- 3月27日 春のクイズラリー開催
- 3月30日 ルリコンゴウインコ, 産卵
- 4月1日 ロバ雌, 死亡
- 4月2日 仔ウシ3頭, 初めて放飼場に出す



- 4月2日 **からくり時計除幕式**
- 4月4日 オランウータン雄1頭, モンキーセンターより搬入
- 4月6日 ムフロン, 1頭繁殖  
" ホンドザル, 1頭繁殖
- 4月7日 カピバラ雌, 死亡
- 4月9日 ムフロン, 1頭繁殖
- 4月12日 ハワイガンの雛, 1羽死亡
- 4月13日 アオミミキジ, 展示
- 4月17日 キングペンギン, 換羽終了
- 4月18日 ファンボルトペンギン, 産卵
- 4月20日 サカツラガンの卵, カラスにとられる
- 4月22日 ゲルディモンキー, 1頭繁殖
- 4月24日 「ワンポイントウォッチング」開催 (カピバラ)
- 4月25日 キバシハイイロガン, 3羽孵化

- 4月25日 エリマキキツネザル1頭, ワタボウシパンシェ2頭  
上野動物園に寄贈
- 4月26日 ダマワラビーの雌, 死亡
- 4月27日 アフリカハゲコウ, 1羽死亡
- 4月28日 ビグミーマーモセット, 2頭繁殖
- 4月30日 イワトビペンギン, 産卵  
" セーブルアンテロップ, 交尾
- 5月1日 ヤツガシラ, 繁殖
- 5月4日 ニホンキジの卵11個を保護受けする



5月5日 アビシニアコロブス, 1頭繁殖

- 5月7日 セーブルアンテロップ, 交尾



5月8日 「羊の毛刈りと紡毛教室」開催

- 5月9日 人工哺育のビグミーマーモセットの仔, 死亡
- 5月11日 コフラミンゴ, 1羽死亡
- 5月14日 「ズーシネマ」コモドオオトカゲ
- 5月15日 「愛鳥週間特別講演会」開催
- 5月17日 エミュウ, マガン, マナヅル, クロヅル, 産卵
- 5月18日 ヤツガシラの雛, 巣立つ
- 5月20日 マントヒヒ3頭, 上野動物園より新着
- 5月21日 キジバト1羽, 保護受けする
- 5月22日 「ワンポイントウォッチング」開催 (ムフロン)
- 5月23日 ビグミーマーモセット, 繁殖
- 5月27日 オランウータン (マコト), 死亡  
" ダチョウ, 産卵
- 5月29日 ハイイロミズナギドリ1羽, 保護受け
- 5月31日 フラミンゴ池にカラス除けのワイヤーを張る
- 6月3日 ウマ, ロバに日本脳炎ワクチン接種
- 6月4日 ヒオドシジュケイ, 2羽孵化
- 6月5日 クロヅル, 1羽孵化
- 6月7日 カリフォルニアアシカ, 1頭繁殖  
" クロヅル, 2羽目孵化

- 6月9日 カリフォルニアアシカ, 1頭繁殖
- 6月11日 小動物コーナー, 第2土曜日で混雑する  
" 「ズーシネマ」ヤマネコ



6月12日 「ゆかいな森の音楽会」開催

- " ウスユキバト, 1羽孵化
- 6月13日 ベニバシガモ, 3羽孵化
- 6月14日 ショウガラゴ, 1頭繁殖
- 6月15日 ムフロン, 1頭繁殖  
" オシドリ, 2羽孵化
- 6月19日 アンデスイワドリの雌, 死亡  
" ホオジロオナガガモ, 2羽孵化
- 6月21日 ダチョウ, 産卵
- 6月22日 ツメバガン5羽, ヤク1頭, マントヒヒ2頭, 動物  
交換で搬出  
" クロオビヒメアオバト3羽, 動物交換で搬入
- 6月23日 ゴリラ放飼場にハンモック設置
- 6月25日 ムフロン, 雌1頭死亡  
" アジアゾウ, 交尾
- 6月26日 「ワンポイントウォッチング」開催(モウコノウマ)
- 6月27日 ゲルディモンキー, 1頭繁殖
- 6月28日 タンチョウ, 1羽孵化(人工)  
" クロヅル, 1羽孵化
- 7月2日 ムギワラトキ, 1羽孵化
- 7月4日 ヤギ, ヒツジ舎にヨシズを張る
- 7月7日 気温高くゴリラ水浴する
- 7月9日 「ズーシネマ」海をわたるタカ
- 7月10日 オシドリ2羽孵化
- 7月14日 気温が高いためキリンの放飼場に水をまく
- 7月15日 暑さのため, トナカイ, 池につかる
- 7月16日 エミュウの雛10羽, 搬出
- 7月17日 ファンボルトペンギン, 換羽始まる
- 7月20日 グレビーシマウマ全頭に破傷風ワクチン接種
- 7月22日 シロガオマーモセット, 1頭搬出
- 7月24日 ビグミーマーモセット, 1頭繁殖  
" 「ワンポイントウォッチング」開催(アビシニアコロブス)
- 7月25日 ゴリラ, 激しく追いかけ合う
- 7月26日 サマースクール開催~28日
- 7月27日 シコクヤマドリの雌, 1羽死亡
- 7月29日 幼稚園協会及び小学校生活科の研修会を実施
- 7月30日 ホオジロオナガガモ, 3羽孵化

# 飼育よもやま話

Animal Episode

## コロブスの赤ちゃんが生まれたよ

Colobus has had a baby!

風薫る五月、爽やかな光が降り注ぐ五月晴れの空の下。今年もアビシニアコロブスの赤ちゃんが生まれました。ちょうど、端午の節句—五月五日—に生まれたので健やかにたくましく育つようにという願いをこめて“タンゴ”と名付けました。

アビシニアコロブスは、アフリカのエチオピアからケニアにかけて生息しています。家族単位で樹上生活を営み、めったに地上へ降りることはないといわれます。そのため、高い樹と樹の間をバランスをとって飛び回ることが出来るようにたいへん長い尾を持っています。また「コロブス」とは、ギリシャ語の



「ちぎれた」「かたわにされた」という言葉からきていますが、それは前腕の親指がいぼのような感じで痕跡でどの大きさしかなく由来しています。また、野生では樹の葉を主食としているところから「リーフ・イーター（葉を食べるサル）」とも呼ばれています。黒と白のツートンカラーの美しいサルです。

さて、話をタンゴにもどしましょう。今、毛色の話をしましたが、生まれたばかりの頃のタンゴの体毛は何色か、みなさん想像できますか？—実は全身が真っ白なのです。そして、毛のない部分（顔など）は淡いピンク色で親の黒っぽい色とは対照的です。この色の違いは、コロブスの他にも当園では全身が銀色の毛で覆われているシルバートンにも見られます（誕生間もない頃は全身が金色に近い橙黄色！）。このようにたいへん目立つ色となっているのは、外敵に襲われやすいのでは、と考える方もいらっしゃるでしょう。しかし、コロブスやシルバートン（共にリーフ・イーターです）のように家族単位で生活するタイプのサルは、この色の違いで、赤んぼうを認識すると同時に、赤んぼうを守ろうとする本能を刺激するようです。その証拠に母親だけでなく兄弟姉妹にあたる個体もその赤んぼうを抱こうとしようと試みたり、実際に面倒を見ているところが観察できます。この色も生まれて50日ほどで変化が見られるようになります。おでこや、尾の中ほど、腹部側が黒色化してくるのです。こうしてだんだんと親の毛色へと近付いていきます。まるで、白いキャンパスに墨を少しずつ付けていくかのように日に日に黒色の箇所が増えていくのを観察するにつけ、自然の不思議さを感じずにはられません。さあ、みなさんもぜひタンゴに逢いに来て下さいね。さて、タンゴの今日の色あいはどうなかな？

高橋 宏之 (Hiroyuki Takahashi)

## アシカたち

Ashika's

どうぶつこうえんニュース No. 16. 18で紹介したアシカの仔イチはその後順調に成長して1993年6月26日にブリーディングローンのため、よその動物園に貸し出されていきました。

アシカは春に出産してそれほど日をおかずに交尾があり、約1年の妊娠期間を経てまた出産という周期をもっています。'92年に出産を経験したキキをこれにてらしてみると'93年にも増える予定でしたが失敗に終り、チコという別の雌は2年連続の死産という残念な結果となってしまいました。

ですから今年はキキ・チコ・ミューの3頭の雌から、と期待していたのですが一昨年、昨年と5月の中旬出産だったものが6月に入っても食欲は落ちてこない、元気にプールを泳ぎ回っているといった具合で今年もダメだな、とあきらめかけていると6月7日にチコ、6月9日にキキとたてつづけに繁殖がみられました。特にチコは2度の死産のため、陰部の様子があまり良くなかっただけに私たち飼育係もひと安心です。この2頭はそれぞれ2番目、3番目に生まれたということで6月7日生まれの個体を“ニイ”、6月9日のほうを“サン”と名付けました。

人間の場合、初めての仔育てでは赤ん坊の一挙手一投足にふり回され、おろおろしがちですが、2度目、3度目ともなるとコツもわかり、ある程度手をぬいても大丈夫と聞いたことがあります。今回この2頭の母親をみて、育児というものは人も他の動物も同じなんだな、とつくづく感じました。



育児初体験のチコは変な物音を聞いたり、見知らぬ人や物を見つけたりと皆さんがよく聞くアシカの鳴き声とは違うしわがれた声で仔を呼び、安心できる場所に移動しようとし、他の雌が近づいても同じです。一方、キキのほうはゆったりと構えて自分のペースで育児に専念しています。

スラッとした体つきで美人顔のチコについているのがニイ、少しポッチャリとして愛敬のある顔つきをしているキキのそばに居るのがサンで2頭ともずいぶん大きくなって以前ほど母親にべったりというわけではないので、ちょっと見ただけでは2頭の見分けは難しいかもしれません。今、彼らは自由気ままにアシカ池を泳ぎ回っていますがまだまだ子ども、時々甘えた声で母親に寄っていき、乳を飲んだりそばで眠ったりしています。こんなアシカたちをこれからも温かく見守ってあげて下さい。

樽川 修 (Osamu Tarukawa)

# 健康管理センターから

From the Animal Health

## ツベルクリン検査

Tuberculin Test

動物公園では、主として霊長目の動物を対象にして、動物の検疫時及び機会のあるたびに、動物の結核の予防・診断を目的として、ツベルクリン検査を行っています。

ツベルクリン検査は、ヒトの場合は前腕部にツベルクリン液を注射しますが、霊長目では腕には毛が生えていますし、あとで注射した場所を素直に見せてくれないので、ほとんどの場合は動物を麻酔して、上まぶたの皮膚の中にツベルクリン液を注射します。

診断液は、霊長目では動物用ツベルクリン液を、生理食塩液で5倍に希釈したものを、0.1ml使用します。

そして注射した後、24時間、48時間、72時間で注射した上まぶたを観察し、陽性・陰性・疑陽性を判断します。

ヒトと違って動物の場合は、BCGによるワクチン接種をしておらず、またツベルクリン液自体が結核菌以外の細菌にも反応を示すので、疑陽性・陽性の場合は、さらに再検査、レントゲン検査、ノドの奥の拭い液・胃液の培養検査等を行い、適切な処置を施します。

また結核菌の培養検査は、従来の方法では4～8週間かかっていましたが、結核菌のRNAを増幅し、結核菌に特異なDNAとこの増幅産物が形成したRNA-DNA混成物を測定し、検体中の結核菌を直接検出する最新の検査法では、1日で判定できるよ



ホンダザルの場合はこのように、押さえておこないます。

うになりました。この方法も今後は併用していきたいと思えます。

中村 誠 (Makoto Nakamura)

## 平成6年度後期行事予定表

行事名	期 日	内 容
アニマルスクール	10月8日 12月10日 3月11日	標本等を使用し、動物の生態を解り易く紹介し、動物に対する疑問に答えます。
写真コンクール	募集10月10日まで 展示11月1日～30日	動物公園内での、動植物とのふれあいを題材とした写真を募集します。
動物愛護週間特別展示	9月1日～30日	国際保護動物の現状(仮称)として、絶滅の危機に瀕している動物の現状を紹介し、
敬老の日記念行事	9月11日	敬老の日にちなんだ講演会を開催します。
動物愛護週間特別講演	9月18日	愛護週間にちなんで、「ガンのわたり」と題した講演会を開催します。
自然と遊ぶ教室	10月16日	草木や木の実で遊びながら自然と親しんでいただく教室を開催します。
動物を計る会	10月30日	動物を通じて、計ること、「計量」に対する意識を高めて頂くために開催します。
Zooクイズラリー	11月3日 3月26日	動物のクイズを通じて、動物の正しい知識を学んでいただくために実施します。
クリスマスのつどい	12月4日	動物のお話を聞いたり、ツリーの飾りを作ったりします。
新春特別展示	1月4日～31日	干支の動物の「イノシシ」を写真パネルを中心に紹介します。
新春特別行事	1月7日	新春にちなんだ催物を開催します。
バードウォッチング	1月16日 2月11日	園内の大池周辺に見られる野鳥の観察を行います。
特別展	通年	動物と環境のかかわりをより詳しく紹介します。
ワンポイントウォッチング	毎月第4日曜日	毎回、ある動物にスポットをあてて、飼育担当者から直接話を聞きます。
動物映画会	日曜日・祝日・春、夏休み	動物をよりよく知っていただくために上映します。
ズーシネマ	9月10日 11月12日 1月14日	第二土曜日に子供達を対象に映画会を開催します。



ソデグロバト